

「おとふけ」の 伝承

私たちのふるさと「おとふけ」。先人たちの労苦があり、いま、私たちの住む「おとふけ」がある。広報おとふけでは、音更町に根をおろし、ふるさとを築いてきた人たちの後世に語り継ぎたいお話しを紹介しています。



中山 武雄さん
大正11年 9月30日生まれ。
緑陽台仲区在住

生まれと育ち

私 は大正11年9月に、男5人、女1人の兄弟の中で、4男として新潟県長岡市で生まれました。

昭和元年、先に大津村静内に入地していた母方の祖父の招きで同地に来ました。

小学校に入学する年齢だったので、祖父の知り合いの大津小学校の校長先生に預けられ、学校と廊下つなぎの住宅で5年生まで一緒に住みました。

先生の異動を機に、住宅が狭かったため、忠類にいた兄たちのもとに移りました。高等科卒業までの3年間、兄たちが働いていた店の手伝いをしていました。

学徒動員・戦地で 生死の境に

高 等科を卒業後、長岡に戻って旧制商業学校に入学しました。

当時、戦争が激化する時代でしたので、昭和16年1月、18歳で旭川第7師団第25連隊に入隊し、3カ月の教育訓練を受けて、中国大陸の戦線に派遣されました。

昭和19年8月18日は、一生忘れることのできない日となりました。私は5発の銃弾に倒れ、障がいが残るほどの傷を負いました。

雨の中を担架で野戦病院へ運ばれていくとき、そこにいるはずのない母親が「こつちだ、こつちだよ」と提灯のような明かりを手に自分を導いてくれているのです。

子を思う母の深い愛情が、自分を生死の境から救ってくれたのだらうと思っています。北京の陸軍病院で入院治療し、昭和20年2月に帰国。旭川陸軍病院でリハビリを続け、同年5月1日付けで兵役を免除となりました。

23歳の若さでも自分には未来はないと思い、実家があった本別町仙美里に帰ると、母は1年前に亡くなっていました。悲しい日々が続きました。

新たな人生の スタート

5 年間、入退院を繰り返しながらも結婚し、昭和29年、夫婦で音更市街に「竹やん食堂」を開業。おかげさまで大繁盛し、多くの人から愛されました。その後、日甜

音更原料事務所で働き、ピートの作付けを中心とする仕事では、農家の人たちに大変お世話になりました。

地域に支えられ

そ の傍ら、昭和53年から住んでいる緑陽台地区で、老人クラブに加入。会長を20年、現在も続けています。町や十勝地区の老人クラブ連合会でも多くの出会いがあって、同じ時代を生き抜いてきた皆さんと充実した日々を過ごしてきました。

また、身体障害者福祉協会音更分会や町の戦傷病者相談

員を引き受け、社会奉仕活動もさせていた、だいています。

人生から得たこと、 願うこと

戦 争では、身体と心に大きな傷を負いました。

30歳までの命と言われ涙にくれた日々もありましたが、不自由になつた自分を嘆くのではなく、意地と根性で前向きに生きてきたつもりです。

そんな私の思いに皆さんが本当に誠心誠意こたえていただき、いつも皆さんに支えられてきた人生です。

平和の尊さを学び、高齢者も障がい者も区別なく地域で生きて暮らしていきたい。お互いが支え合う人になつてほしい、そう願っています。



音更市街にあった「竹やん食堂」